



写真-1 国道 176 号呉服橋から猪名川に架かるビッグハープを撮影（平成 27 年 7 月）

■ かつて多くの皮革工場が集積していた川西市火打地区

写真-1 は、国道 176 号の呉服橋（くれはし）から猪名川と阪神高速 11 号池田線の新猪名川大橋（愛称：ビッグハープ）を撮ったものです。このビッグハープの西側に広がる川西市火打地区には、かつて多くの皮革工場が集積していて、川西市の主要産業のひとつでした。姫路・龍野に次いで県下 3 番目の規模の生産地として全国生産の約 10%を担い、昭和 40（1965）年には 90 を超える皮革工場がありました。

しかし、皮の鞣（なめ）し工程で生じる排水による川の水質汚染が問題になったり、安価な輸入品に押されたりして徐々に衰退していきます。さらに、昭和 60 年代からの円高や産業構造の転換に伴う後継者不足に加え、平成 7（1995）年 1 月に発生した兵庫県南部地震による被害も相まって、同年 3 月に北摂地区皮革工業協同組合から、地区の再開発に関する要望書が川西市長宛てに提出されました。

一方、市では皮革排水を公共下水に流すための火打皮革汚水前処理場の維持に要する多額の財政負担が大きな課題となっていました。

市はこの要望を受けて火打地区の再開発をスタートさせます。結末は P.4 に。

■ 火打地区の皮革産業の起源

火打地区の皮革産業の起源について、『川西市史・第 3 巻』には概ね以下のように記されています。

言い伝えによると、火打地区の皮革産業の始まりは江戸時代中期のことといわれ、参勤交代の大名行列が太鼓の革の破損で困ったときに、従者の中に播州出身者で皮鞣しに長じた者がいて、馬の皮を猪名川の水に漬け、塩と菜種油で足もみして鞣しを行い太鼓を修理、これを見ていた土地の農民が技術を習得したのが事の興りであるとされています。

一方、『兵庫県皮革産業の歩み』には、以下のように記されています。

地元に伝わる話として、慶長 8 (1603) 年、徳川家康が宮中参賀に向かうにあたり、火打の役人に命じて絆綱(ほどしつな:馬が歩けないようにする足かせ綱のこと) および鞣し革の用達(ようたい)を命じたといわれています。つまり、その頃火打地区には皮鞣しを行う人たちがいたということです。

また、寛永(1624~1644)の頃に播磨の住人・西森某がこの地に来て、製革の有利なることを力説、村民に鞣し業の普及を図った(意図がよくわかりませんが)といわれています。ただ、元禄 8 (1695) 年の記録によると、皮革生産はまだ小規模であったとか。

江戸時代末期の元治(1864~1865)・慶応(1865~1868)の頃、主な原料として馬皮・牛皮を摂津国の西浜と呼ばれた渡辺村より購入し、綴革(とじかわ)と呼ばれる白鞣し革を製造していました。綴革は革紐、鎧具、刀剣の柄巻、さや巻、剣道具、細工用革、塗革用などとして大坂、姫路などに売られていました。

加えて、以下のような記述があります。

姫路は、わが国の皮革のふるさとで、その発祥の地が市川沿いの高木地区です。原料の皮を市川の水に漬け、毛根部に発生するバクテリアの酵素の力で脱毛し、塩と菜種油を用いつつ揉み上げ、天日に晒して薄い乳白色の革に仕上げるもので、この姫路革の技法は江戸時代中期には完成していたそうです。

織豊時代、皮革は武具調達の面からは特に重要な資材であったことから、各藩が姫路の優れた製革技術を求めて姫路の革工を招いたようで、川西市にも革工が姫路から移住してきたという話が残っていると。

火打地区の皮革産業の起源について、いずれが正しいのかわかりませんが、天保 2 (1831) 年作成の「火打村差出明細帳」には、寛永 10 (1633) 年 7 月の三代将軍・徳川家光の上洛に際し、革の絆綱を献上し、それが代々の将軍継嗣に際しての恒例行事となったことが詳しく記されています。

将軍への献上品ですから、おそらく立派な革でつくったはずなので、この頃にはすでに優れた製革技術が確立されていたものと思われます。



図-1 川西市役所周辺の地図

また、火打村の「物産取調書」によると、明治 10 (1877) 年当時の火打村には、鞣し革製造戸数 36 (専業 1, 補助業 35) とあり、皮革業と関連して毛を加工する筆上毛職 22 戸、筆毛職 6 戸(すべて補助業)と記されています。

■ 猪名川で川漬けをする

「革」の原料となる「皮」は、摂津国・渡辺村から舟に積んで神崎まで運び、そこから陸送で火打村に運び込みます。鞣しの技法は、姫路から伝えられたことから姫路革の技法と同じと思われ、牛皮の川漬け、塩入れ、菜種油による油入れ工程、天日乾燥、足揉みを繰り返して仕上げます。

工程の第1段階は脱毛で、そのために猪名川で川漬けをします。漬ける場所は池田村より上流、木部（きべ）村※1までの5～6町（≒500～600m）の区間、火打村からおよそ8町（≒800m）の場所です。江戸時代における鞣しの工程で、猪名川の水と関わりのあるのは川漬けだけですが、これが猪名川に大きな汚濁負荷を与えたとは思えません。また脱毛作業は、川漬けが終わってから河原で行うので、加えて生産量もそれほど多くなかったことから、川に排出される汚濁負荷量はそれほど多くはなかったと思われます。

汚濁負荷量が増えたのは、明治以降に石灰漬けなどの近代的な製革技術が取り入れられたことが大きく影響しています。皮革製造工程から排出される排水の大部分は、水戻し、脱毛石灰漬けを含む準備工程から発生し、排水汚泥は、脱毛石灰漬けで使用した未反応の水酸化カルシウム（消石灰）と硫化ナトリウムから派生する無機物、溶解した毛を含む蛋白質の混合物が主成分となっています。

このように、近代的な製革技術が導入された結果、江戸時代に行われていた猪名川での川漬けによる脱毛は、大正10（1921）年頃から行われなくなったそうです。

※1 木部村：呉織（くれはとり）と漢織（あやはとり）が、この地で機を織り染色を行い、猪名川で水洗いをして、絹を川原で延べて日に晒したことから、この地が絹舒里（きぬのへさと）と呼ばれるようになり、これが略されて木部と呼ばれるようになったとされる。

■ 皮洗い（川漬け）と池田の酒

『江戸時代諸国奇談』（原武男著）に、池田酒にまつわる以下のようなエピソードが紹介されています。

池田の酒はうまいとの評判であったが、その池田の酒屋たちが、「我々が酒を造っている川上で動物の皮を洗うとは何事か。お客さんの印象が大変悪いので、火打の人に猪名川で動物の皮を洗わないように」と訴えて止めさせました。

ところが、その後池田の酒がますます評判で、思い起こしてみると猪名川で動物の皮を洗わなくなった頃から酒の味が落ちたことに気が付き、火打の人に従前どおり皮洗いを認めました。すると酒の味が元のうまさに戻ったとか。

江戸時代中期の池田酒発展は、池田の酒造りの祖と云われる満願寺屋がいち早く手に入れた「酒造御朱印」（酒造免許）のお陰と言われています。「御朱印」を授かった池田の町には酒造業者が増え、甘口の酒が台頭していた元禄の世に、猪名川の水を仕込み水にして醸したスッキリした味わいの「辛口」池田酒はたちまち評判になりました。馬の背に酒樽を載せて江戸に売り込みに行ったところ大盛況となり、廻船を仕立てて搬送石数を増やし、あっと言う間に「池田酒」は、「丹醸酒」を醸した伊丹と並んで江戸下り酒（江戸積み酒）の銘醸地としての地位を確立しました。

その後、安永5（1776）年満願寺屋の失脚とともに「御朱印」は取り上げられ、宮水の発見により辛口酒を醸すことのできる灘に江戸下り酒の銘醸地としての地位を譲ることとなりました。

呉服（くれは）の里には、最盛期38軒の酒蔵があったそうですが、現存する池田酒醸造元※2は元禄年間創業の「呉春（ごしゅん）」（写真-2）だけです。呉春特吟の首掛け札に『呉春は池田の酒のこと。「呉」は池田の古い雅称「呉服の里」に由来し、「春」は唐代の通語にて酒のこと。依って呉春は池田の酒。』と記されています。

今、呉春は五月山から流れ出る伏流水を自家井戸より汲み上げて仕込み水として使用しているそうです。

※2 池田酒醸造元：池田市には「呉春」のほかにもう1軒、元禄10（1697）年創業の老舗吉田酒造があったが、兵庫県南部地震により酒蔵が全壊した。その後、酒造りの拠点を加西市に移して製造を再開。再建した池田市の蔵で、ろ過や瓶詰めなどを行い、池田酒の伝統を受け継ぐ「緑一（みどりいち）」を販売している。



写真-2 呉春（阪急池田駅を北へ約400m）

■ 川西の皮革排水と友禅流しとの関係

川西市域に友禅染業が進出してきたのは大正期といわれています。友禅染業は、染色した布地の洗浄用に大量の水を必要とすることから、清流・猪名川の豊富な水が目当てだったようです。

鶯の森から絹延(きぬのべ)橋にかけての猪名川沿いに木村染工や滝井友禅などの染色工場が立地し、冬になると清流に布を流して洗い、川原では色とりどりの布を干す光景が見られました。合成染料がない時代、染料はもっぱら草木などを原料とした天然染料が使用されていました。この場合、生地に染めつく力が弱いいため、夏のぬるい水に晒すと必要な色まで落ちてしまいます。冬の冷たい水に晒すと繊維がぎゅっとしまり、思った色に染め上がることから、友禅流しはもっぱら水の冷たい冬に行われていました。

猪名川では昭和 48 (1973) 年頃まで友禅流しが行われていたようです。写真-3 は、同年に猪名川・小戸(おお)井堰の下流で撮影された友禅流しの光景です。

下流の伊丹市や尼崎市においても友禅流しが行われていたそうですが、皮革排水の影響はなかったのでしょうか。

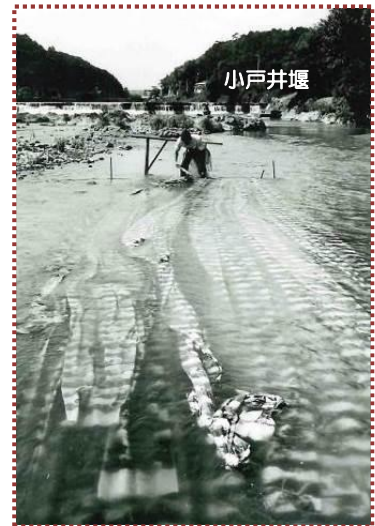


写真-3 小戸井堰下流における友禅流し
(昭和 48 年) (川西市教育委員会提供)

■ 猪名川の水質の変遷

かつて猪名川では友禅流しが行われるなど、良好な水とともに生活文化が形成されていましたが、昭和 30 (1955) ~40 (1965) 年代の社会経済の発展と都市化の進展に伴い猪名川の水質は悪化していきます。そこで、昭和 41 年 (1966) 4 月、猪名川の水質を守るため、川西市、豊中市、池田市、箕面市、伊丹市の 5 市で汚水进行处理する「原田処理場」を豊中市に建設しました。

昭和 46 (1971) 年前半ごろまでが最も悪い状況で(中園橋の BOD 値 75%値 100.0mg/ℓ 以上)、特に最明寺川、駄六川などの水質が悪化しました。

そのため、昭和 44 (1969) 年に「水質汚濁対策連絡協議会」を発足させ、下水道の整備および工場排水の上乗せ条例に基づく厳しい基準による規制、水質自動監視装置の設置(軍行橋・銀橋)による水質の常時監視などの対策が講じられてきました。

さらに、当時、川西市には多くの皮革工場があったことから、主として鞣し工程から排出される汚水进行处理するために、火打皮革汚水前処理場が建設され、昭和 44 (1969) 年に操業を開始します。



写真-4 五月山・秀望台から猪名川を撮影 (平成 27 年 7 月)

昭和 49 (1974) 年 10 月、原田処理場につなぐ猪名川流域下水道に、川西市で初めて小戸・美園・小花地域の汚水が流せるようになりました。その結果、水質は昭和 50 (1975) 年頃から大幅に改善されてきており、下流の一部で水質が悪い箇所があるものの、上流・中流では比較的良好な水質となっています。

下水道普及率は昭和 45 (1970) 年頃から上昇し始め、池田市では昭和 55 (1980) 年頃には 100%に近い普及率となり、豊中市、箕面市、尼崎市でも昭和 60 (1985) 年頃には 100%に近い普及率となっています。

因みに川西市では、平成 9 (1997) 年に 95%を超え、平成 19 (2007) 年には 99%を超えました(川西市上下水道局調べ)。

■ 新しい街づくりが概成

平成 10 (1998) 年、川西市火打地区の皮革工場および前処理場の跡地を含む約 22.9ha で、都市基盤の整備に合わせ住宅供給を行う住宅街区整備事業による再開発を目指します。しかし、著しい社会情勢の変化や長引く経済の低迷により事業着手には至らず、住宅街区整備事業からの撤退を余儀なくされました。

そして、まず皮革事業者の転廃業により皮革工場を撤去、更地にすることを目的に、平成 15（2003）年、皮革工場等転廃業事業に着手し、火打の皮革工場は平成 17（2005）年末にその歴史の幕を閉じました。皮革工場の操業停止に伴い、同年 12 月、火打皮革汚水前処理場は操業を停止、閉鎖され、平成 24（2012）、25（2013）年度の 2 ケ年で解体工事が行われました。

一方、本地区の再開発事業については、権利者や市民を対象としたアンケート調査などを行い、平成 20（2008）年 3 月に「中央北地区土地利用基本構想」を策定します。平成 21（2009）年からは土地区画整理事業を目指して順次計画を具体化し、南北に貫くせせらぎ遊歩道（延長約 600m、幅 16m）や、中央公園（2ha）などを整備する計画が平成 22（2010）年 7 月に都市計画決定されました。平成 23（2011）年 3 月の土地区画整理事業の事業計画決定により、本格的に事業に着手することとなりました。

事業が一区切りを迎えたのは 25 年後で、換地処分が完了したのは令和 2（2020）年 7 月でした。

■ モノローグ

令和 4（2022）年 12 月下旬、本稿を書いていると皮革工場跡地「キセラ川西地区」を見ていないことに気づき、寒い日でしたが現地を歩いてきました。

川西市立中央医療センター（写真-5）や商業モール・オアシスタウンなどを中核にキセラせせらぎ公園や遊歩道などが整備され、ゆとりのある広大な空間が広がっていました。

筆者は、西側を走る主要地方道 12 号川西篠山線を時々バスで走るのですが、バスからは見えにくいので、これだけの空間が広がっていることに正直驚きました。

暖くなれば、広場で憩う多くの市民でにぎわうと思います。



写真-5 川西市立中央医療センター

オシロイバナ（白粉花）

オシロイバナ科オシロイバナ属の多年草または一年草。南アメリカ原産で江戸時代初め頃に渡来。花が美しいため観賞用に栽培されるが、広く野生化もしている。花は夕方開き、芳香がある。このため和名としてはユウゲショウ（夕化粧）とも呼ばれるが、この名はアカバナ科のものにも使われているので注意を要する。夜間に開き花筒が長いので口吻の長い大型の夜行性鱗翅目でなければ吸蜜は困難である。日本のオシロイバナでは主にスズメガが吸蜜し、送粉に関わっている。種子には粉状の胚乳があり、これがオシロイバナの名の由来。猪名川の河川敷に咲いていた。



写真-6 オシロイバナ

（呉服橋付近の猪名川河川敷で令和 4 年 9 月に撮影）

【参考資料】

- 1 『川西市史・第 3 巻』 川西市 昭和 55 年 9 月
- 2 『川西歴史今昔』 小田康徳 平成 30 年 1 月
- 3 『川西の歴史と産業』 菅原 巖 平成 19 年 8 月
- 4 『兵庫県皮革産業の歩み』 電子じばさん館 HP
<http://himeji.jibasan.jp/leather/history/index.html>
- 5 猪名川河川事務所 HP

- 6 『呉春』 お酒のひょうたん屋HP
<https://www.hyotan.co.jp/cnt/sake/gosyn.html>
- 7 『緑一：池田酒の歴史と伝統を受け継ぐ酒』 たのしいお酒.jp・日本酒
<https://tanoshiiosake.jp/5819>
- 8 『キセラ川西整備事業誌、皮革排水』 川西市HP 令和3年3月
- 9 『製革準備工程改善による排水汚濁負荷の低減技術（平成13年度）』 兵庫県立工業技術センターHP
<https://www.hyogo-kg.jp/jirei/vol03-19>
- 10 『木部町、渡辺津、オシロイバナ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和5（2023）年5月 『ひょうご水百景』No.172

改訂：令和8（2026）年8月 『ひょうご水百景』No.172